

2023年3月5日 受難節第2主日礼拝

メッセージ「それでも最後に残るもの」

牛田匡牧師

聖書 創世記 6章5-22節

今回のお話は、先週読んだ「失樂園」、エデンの園での出来事の続きで、同じく『創世記』の中から「ノアの箱舟・洪水」の話でした。おそらく教会に行ったこともなく、聖書を見たこともないけれど「ノアの箱舟」の話は聞いたことがある、という人も多いのではないかと思います。この「洪水物語」は『創世記』の6章から始まって9章まで記されていますので、なかなか長い分量ですが、今回がその最初の部分です。

5節からですが、「⁵主は、地上に人の悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾くを見て、⁶地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。⁷主は言われた。『私は、創造した人を地の面^{おもて}から消し去る。人をはじめとして、家畜、這うもの、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔やむ』」……。『創世記』の冒頭1章2章にかけて、「天地創造」でこの世界を創り、そこに生きとし生けるもの、あらゆる命を創り出した神ご自身が、大洪水によってそれらすべてのものを地上から滅ぼす(17節)と言うのです。そして、その原因は「地上に人の悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾」(5)いたからである、と記されています。人間のせいで、人間だけではなく世界中の全ての命が滅ぼされるというのは、残酷なような印象も受けます。しかも、神様は「人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」(6)とも言われています。ですが、そのようなことを言われたら、私たちも「だったら初めから善良で、決して罪を犯さないような人間を創ったら良かったじゃないか」とも言いたくなるのではないのでしょうか。なんで神様はこんなにも回りくどく、面倒くさいことをされるのでしょうか。

実はこのような「洪水物語」は、ヘブライ語聖書のオリジナルではなく、ヘブライ語聖書よりもさらに古いバビロニアの神話にも、よく似たお話がありますし、また世界各地にもそれぞれ洪水の神話というものはあるようです。とどのつまり、それらは豪雨や津波など、各地におけるそれぞれの洪水の経験を、人々が物語として語り継ぎ、それらがやがて伝説や神話になっていったのだらうと考えられています。ですが、そこにどのような理由や原因、神の意図を読み込むか、という点において、やはりこのヘブライ語聖書に記されている洪水物語は、特徴的な部分があるのだ

ろうと思います。

今回の 6 章は、神様から洪水が予告されたという場面でした。続く 7 章では大雨が降り続いて洪水となり、地上にある高い山々の頂きも全て水で覆い隠されるほどとなります。そして 8 章ではいよいよ雨がやみ、水が引き始め、乾いた地面が現れ、9 章では空にかかった虹の下で、神様とノアとが新しい契約を結ぶというお話の流れになっています。もし全ての命を創られた神様の意図、洪水の目的が、世界を滅ぼすことであったなら、わざわざノアを選び出し、巨大な箱舟を建造させて、そこに地上のあらゆる生き物たちを二匹ずつ入れるなどということをする必要はなかったはずで、それこそ全知全能で、時間も空間も超えて、無からの有を生み出し、全世界を創造することの出来るような神様だったら、「一度作った人間や世界が気に入らない、後悔した」と言うくらいなのであれば、この世界を白紙撤回して、また一からやり直すことも出来たはずで、……にも拘わらず、神様はそうはされませんでした。それは何故でしょうか。

『創世記』1 章で、世界のあらゆるものを造られ、「それらは極めて良かった」(31)と言われた神様は、最後に作った人間たちを祝福して「産めよ、増えよ、地に満ちよ」(28)と言われました。それと全く同じ言葉で、9 章でも箱舟から大洪水によって新しくされた大地に降り立ったノアたちを祝福されました。このことは洪水という破壊が、神様の真意、目的だったのではなく、洪水後の世界の再創造こそが、神様の目的だったのだということを表しているのではないかと思います。

14 節と 15 節には、神様から建造を命じられた箱舟の作り方や大きさが記されていますが、1 アンマというのは、一番長い中指の指先から肘までの長さの単位で約 45cm。仮におおよそ 50cm として計算すると、2 アンマが 1m になりますから、箱舟の大きさは長さ 150m×幅 25m×高さ 15m となりますから、かなり長細い形になります。こんなにも巨大な舟を、ノアたちはどうやって作ることが出来たのでしょうか。ちなみに同じような洪水物語が記されている『ギルガメシュ叙事詩』では、120 アンマ(54m)の立方体の舟となっています。そもそも日本語で「箱舟」と訳されているヘブライ語(テバー)は、単に「箱」という意味ですから、立方体の方がふさわしそうです。では、この長さ 150m で幅 25m という極めて長細い箱のサイズは何かというと、預言者エゼキエルが幻の中で見た新しいエルサレム神殿の大きさと一致します(エゼ 40:48-41:9)。このことから、ノアの箱舟は、実際

に作ることが出来、すべての動物たちが乗り込むことが出来た巨大な建造物と言うよりも、むしろ象徴的な意味で、「世界の破滅から全ての命を救うもの」「世界の回復が始まる場所」として、神殿が暗示されているのだと理解することが出来ます。

それにしても何故、このような洪水物語が、聖書に記されたのでしょうか。12 節には「神が地を見られると、確かに地は腐敗していた。すべての肉なる者が、地上でその道を腐敗させたからである」とあります。確かに、昔も今も、人間は悪を行い、地上には腐敗が満ちています。しかし、だからと言って、すべてが一掃されて良い、リセットされて滅ぼされても構わないなどとは決して言えないはずで、もしも「全てを創造された神様なのだから、全てを破壊することも許されている。また私たち人間には、そこに意見することは許されていない」と理解しているのであれば、それはまるで「親には子どもを虐待することが許されている」と言っているのと同じくらいの誤解であり、抵抗する気持ちも発想も奪われてしまっているくらいにハラメントを受けている状態なのではないでしょうか。

豪雨も洪水も、地震も津波も、環境破壊や温暖化、人工的な工作物など人間の手による影響もあるとは言え、根本的には人間の思惑を超えた天災です。予期しなかった事故や病気と同じように、それらの中に神様の意図、神様の目的を見出し、それらを神様からの警告や人間への罰と受け止めるかどうかは、人間の側に委ねられています。そしてその受け止め方次第で、私たちは絶望することもあれば、絶望に終わるのではなくそこに希望を見出すことも出来るわけです。古代の人々も大洪水に見舞われた経験を通して、その経験の意味を問い直し、そこに秘められた神様の意志を見出そうとして、この物語を紡ぎ出し、語り継いできたのでしょう。

神様が創られた世界、全ての命の管理を任された人間たちによって、現代では地球環境それ自体が持続不可能となり、破滅への道を歩んでいます。それを聖書は「地上には悪が満ちていた」と表現していました。しかし、だからと言って、そこで終わってしまうわけではありません。それでも最後に残るものがある……。洪水の中に箱舟があり、大雨の後に虹がかかりました。命の神の御心は、全てを滅ぼし尽くすことではなく、世界を創造し続けることであり、命が営まれ続けることです。「希望は失望には終わらない」(ローマ 5:5)。光は暗闇の中でこそ輝いています。

そしてその光は、たとえ小さくても暗闇の中に飲まれてしまうことはありません。

今週はまた 3 月 11 日がやってきます。東日本大震災から 12 年となります。福島第一原子力発電所の核事故の処理、後片付けと廃炉への行程は、まだ何も進んでいないに等しい状況です。にもかかわらず、それらはいつの間にか忘れ去られて、もう終わったこと、それこそ核事故など無かったかのように幻想的に報じられています。さらに昨年からの相次ぐ電気料金の値上げに伴って、原発再稼働、原発の更新や新設まで已む無しという声までが高まりつつあります。幻想と希望は似て非なるものです。滅びに向かう幻想に目を向け、心を向けるのではなく、命に向かう希望にこそ目を向け、心を向けていく必要があります。

ロシアとウクライナの戦争も先月末で、既に 1 年を超え、被害は日に日に増しています。トルコ南部とシリアで発生した大震災も発生から約 1 か月となります。世界各地で天災も人災も、絶え間なく続いているようです。そのような中で、私たちはどこに目を注いでいけばよいのでしょうか。神様の御心はどこにあるのか。神様の目はどこに、どのように注がれているのか。私たちはそれをイエス・キリストの生きざま、言葉と振る舞いを通して、知ることが出来ます。力を奪われ、弱く小さくされ、絶望の中にあつた人達、それこそ様々なものの洪水の中にあつた人たち、暗闇の中にあつた人たちに、光を灯し、生きる力と希望を分け与えたイエス・キリスト。そのために権力者たちからの反対に遭い、自らは受難への道を歩いて行ったにも拘わらず、暴力に屈することなく、絶望することもなく、非暴力・不服従を貫いたことによって十字架で殺されたイエス・キリスト。しかし、その命はそこで終わらずに、死から引き起こされ、今も尚世界中に広がり、生き続けています。「それでも最後に残るもの」……命の神が与え、備えて下さる希望に信頼して、私たちは今日もここから歩み出していきます。